

《チェルノブイリ原発事故》 被害が孫に出ていないか？

第1回 ウクライナ調査報告

(2012年2月27日～3月7日)



NPO 法人 食品と暮らしの安全基金

〒338-0003

埼玉県さいたま市中央区本町東 2-14-18

TEL 048-851-1212 FAX 048-851-1214

ホームページ：http://tabemono.info/

チェルノブイリ原発事故当時に母親だった女性に、孫が生まれ始めています。その孫に遺伝的な影響が出ていないか調査取材しました。子どもの健康被害はすさまじいが、孫世代でも遺伝と思われる1例（上の写真）を見つけました。今後の中長期的取材を考慮して、現地での人脈とルートづくりに力点を置いたので、帰国後すぐに「第2、第3の例がある」と、現地から報告がありました。

【現地取材までの経過】

2011年6月5日、イタリア国営テレビの「キエフ病院の子供たちー2011年ーチェルノブイリから25年」という番組がユーチューブにアップされた。

ウクライナでは生まれる子どもに先天異常が増えているだけでなく、脳腫瘍も増えているが、高額の治療費がかかるため、治療を受けられないでいる子どもがたくさんいる。

その子どもたちを救うため、イタリアの団体「ソレッターレ」が財政支援を行っている、という内容である。

番組中、脳腫瘍にかかった赤ちゃんの母親は「1986年生まれ」。「私の町、ミエプトロフスカでは、私と同じ時期に出産したほとんどの母親が、病気の子供を抱えています」と語った。

この赤ちゃんは、チェルノブイリ原発事故で出た放射能によって遺伝的影響を受けた「孫」世代と考えられるから、私にとっては衝撃だった。

「貧しいこの国では、映像を規制できないが、日本なら、この赤ちゃんを見せないでしょう」と語ったソレッターレの代表に、イタリアの知人アルティ氏に依頼して何度も連絡を取ってもらい、協力が得られることになり、ソレッターレの企画で、今回の取材を行うことができた。

(小若)

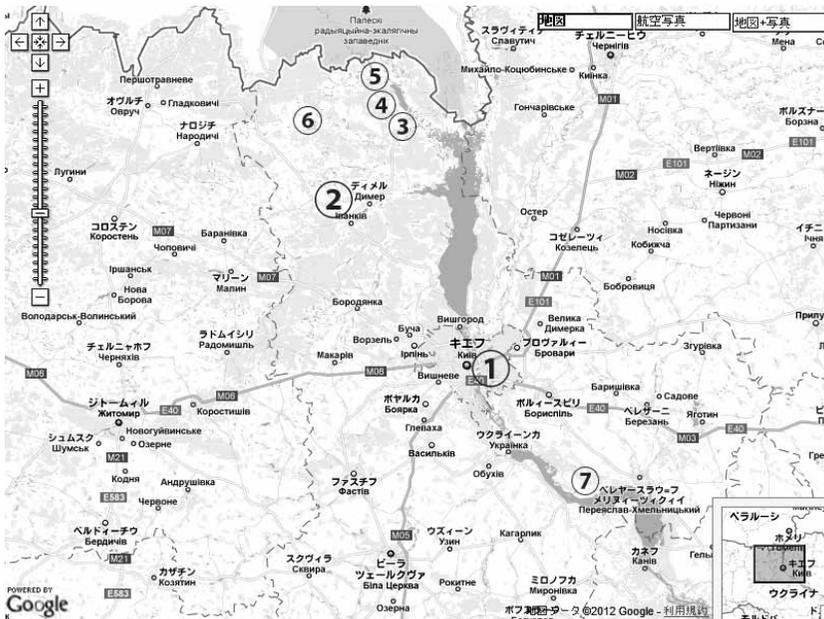


【イタリア国営放送RAI2】

ウクライナ全土取材関連地図



【取材団】
 団長：小若順一
 （食品と暮らしの安全基金代表）
 趙華行
 （チョウ・ファヘン、映像ジャーナリスト）
 林克明（ジャーナリスト）
 <ゲスト>
 林勝彦（NHK『人体』制作者）



【通訳】
 <イタリア語>
 アルルーロ・マリオ・デボルトリ氏
 <ウクライナ語>
 バレンチーナ・モローソワ女史

- ①キエフ
- ②イヴァンキフ
- ③チェルノブイリ市
- ④原発
- ⑤プリピャチ市
- ⑥ノーブイミール村
- ⑦コバリン村

<2月27日>

成田空港を出発。同日夜にウクライナの首都キエフ着。

<2月28日>

■チェルノブイリ博物館

通訳者と打ち合わせ後、「チェルノブイリ博物館」見学。膨大な写真や処理事業に使用したマスクなどが展示されていた。

博物館の外観



汚染地域から避難した子たちの写真

<2月29日>

■イタリアの支援団体「ソレッテーレ」
ダミアノ・リッツィ
会長インタビュー



■「ソレッテーレ」が
支援する地元の慈善
団体「ザポルーカ」の
ナターリヤ・オニプコ
代表と打ち合わせ、お
よび取材計画決定。



■ウクライナ・チェルノブイリ連盟のユーリー・
アンドレーエフ代表を取材

事故処理作業（リクビダートル）の同氏には、
事故直後の作業の様子を中心に聞いた。作業中に



突然電源が落ちて
真っ暗になり、150の
警告ランプが全部点
くなどの緊迫した状
況だったと話した。

またモスクワから
派遣された物理学者

グループや政府委員会は役に立たず、現場の4人
の技術者が取り仕切って難を乗り切ったという。

さらに、アンドレーエフ氏は「被曝3世、4世
を見据えた対策が必要」と述べ、我々の調査対象
となる母子を探してくれることになった。

■ウクライナ小児神経外科協会会長、ユーリー・
オルロフ医師を取材

オルロフ医師が勤務するのは、国立の「ロモダー
ノフ記念神経外科研究所小児神経科」（以下：小
児神経外科病院）。この小児病棟では、5歳以下
の脳腫瘍の患者の比率が近年高まっており、ウク
ライナ全体でも、手術を要する子どもの比率が
チェルノブイリ事故以降高まっている。取材チ
ームが探す「三世代同時被曝の孫」（原発事故当時
の妊婦・胎児・胎
児の生殖細胞）の
話をすると、「その
ような研究は誰も
していないのでは
ないか」とオルロ
フ医師は語った。



オルロフ医師（右）と
「ザポルーカ」会長のナターリヤさん

■小児神経外科病院のお母さんと赤ちゃんを取材

オルロフ医師が治療
している赤ちゃんとお母
さんに話を聞いた。

◎母アンナ・ペンジュク
（1990年8月8日生まれ）
息子：スタス（2011年
12月2日生まれ）脳水腫。



◎母インナ・アフィノ
ジェノーヴァ
（1982年生まれ）
娘：ユーリヤ（2011年
7月11日生まれ）娘は
弱く、母親も7年間妊
娠できなかったという。



<3月1日>

■ユーリー・バンダジェフ
スキー教授
（医師・病理解剖学者、ゴ
メリ医科大学初代学長）

キエフから1時間30分、
イヴァンキフ地区にある中
央クリニックへ。ここは管



理区域の一步手前に位置する。教授は、「少量で
も放射性セシウムは生殖細胞に遺伝的影響を与
える」と隣国ベラルーシの独裁政権下で発表し、5
年間、投獄された経験をもつ。

当日のインタビューでは、「セシウムによる子
どもへの影響、特に心臓異常に注意を向けるべき
と強調した。

■「家族の家」(NPO ザポルーカ運営) 訪問

イタリアの支援団体に援助されてきた地元の団体「ザポルーカ」は最近独立し、病気の子を抱えた両親と子どもが治療中に宿泊できる「家族の家」を運営している。2010年、ウクライナ最高の慈善団体に選ばれた。

ここで何組かの親子の話を聞いた。

◎母：ユーリヤ・キリチュク

(1986年7月7日生まれ) 事故当時は胎児。

祖母：事故当時は妊娠中で西部のヴラジミール・ヴリンスキーにいた。

息子：デニス(2005年8月2日生まれ) 左腎臓にウィルムス腫瘍。



順調に回復すれば、7月頃にデニス君の治療をしばらく休むことができるという。

◎母：オクサナ・ドブガニユク

(1986年4月26日生まれ原発事故の当日)

娘：ソフィア(2009年10月31日イヴァノフレンコフ州ケルヒヒ村生まれ) 神経芽(細胞)腫。

この子は回復に向かっている。

自分たちが写っているパンフレットをもち、回復を喜ぶオクサナさんと娘のソフィアちゃん



◎母：インナ・サフチェンコ

(1986年2月27日 プルタフ州ルブヌイ町生まれ)

娘：ユーリヤ(2006年5月24日生まれ) 腎臓芽腫 = 左3級。



◎母：ベネラ・アフメードヴァ

(1977年3月1日生まれ)

息子：エミール・スコチ(2009年4月23日生まれ) 腹腔の神経芽(細胞)腫。副腎障害。脊髄への転移。

ウクライナ最南端のクリミア自治共和国から、治療のためキエフにやってきた。



<3月2日>

絵本(早川聡子、絵・文)を完成させるため小若が帰国。趙華行、林克明、林勝彦で取材。

■チェルノブイリ原発、居住禁止区域の視察

◎検問所で立ち入り許可証を受領

◎チェルノブイリ市

記念碑撮影。外部からの訪問者専用の2階建てプレハブホテル見学。内部に簡単な展示室があった。

◎チェルノブイリ原発

原発からおよそ400mの地点で撮影。ここから1号機～4号機す



べてが見える。ただし、ここから先が撮影禁止区域となっていた。

◎原発前の犠牲者追悼碑

約30人が死亡し、全員の名前が刻んである。墓碑銘から50～60mの場所に原発の建物があるが、撮影は禁止された。周辺をひっきりなしに工事車両が往き来し、原発建物前では数十人の労働者たちが立ち話していた。



事故処理作業員(リクビダートル)たちの記念碑

◎4号炉石棺前



車で移動し、原発建造物の裏側に回る。目の前に石棺(コンクリートで封じ込めたもの)が見え、

そこだけは撮影が許された。石棺となりの事務所棟と思われる建物から多くの人が出てきてバスに乗り去って行った。大勢の人間が原発に出入りしていることに驚かされた。



原発の建物から出てバスに乗った人たち

◎死の街プリピャチ

かつてチェルノブイリ原発で働いていた技術者・専門家・労働者とその家族が住んでいた町で、人口は4万9000人だったという。4号炉から町の中心広場まで約3km。整然とした



街並みだが、まったくのゴーストタウンとなっていた。

16階建ての廃屋の屋上からは、すぐ目の前に巨大なチェルノブイリ原発の建物群が見えた。



◎帰ってきた人

プリピャチから車で30～40分離れた、かつて400人が住んでいた村へ。高層アパートが連なるプリピャチと違い、昔ながらの一軒家の農家が点在するが、もちろんほぼすべてが廃屋。現在は住民が4人だけ戻ってきている。そのなかの73歳の老夫婦を訪ね、話を聞いた。



◎赤い森

首都のキエフに戻る途中、ガイガーカウンターの数値が急上昇した。7 μ Sv/h以上を示したが、ガイドによると森のなかは20 μ Sv/h以上になるという。放射能で樹木が赤く変色したために“赤い森”と呼ばれる地域は、事故から26年近く経っても、まだこれだけの汚染がある。

<3月3日>

林勝彦氏が隣国のベラルーシの取材へ出発。以後は、趙華行と林克明の2名により取材。

■「家族の家」再訪問、診断書等の書類を撮影

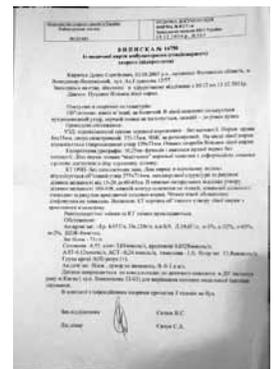
ウクライナの支援団体「ザポルーカ」が運営する宿泊施設を再訪問する。ここで3月1日に取材した母ユーリヤ・キリチュクさんと息子のデニス君の関係書類を撮影した。

この親子は、原発事故時に母親のユーリヤさんが胎児であり、息子のデニス君は“生殖細胞”だった。つまり、取材チームの目的である“三世代同時被曝”による遺伝の可能性があるので、正確な

事実を確認する必要があったためだ。

母のパスポート(生年月日・登録地・住所・婚姻情報)、息子(出生証明書、治療記録、診断書)を確認して撮影した。

2度目の訪問だったので、デニス君以外の子どもや母親、祖母などともお茶を飲みながら、なごやかに交流できた。



デニス君の診断書

<3月4日>

■強制移住村「コバリン村」訪問

チェルノブイリ原発から30数km西にあったノーブイミール村（ロシア語で新世界村）は、事故が起きた1986年から6年間も避難区域に指定されていなかったが1992年、突如村民全員が強制移住させられ、住民は故郷を失った。

移住先は、首都キエフから南東へ車で1時間半のコバリン村。ここへ1000人を超える避難民が入植した。

これまでに約300名が亡くなったが、40代、50代で亡くなった人が多く、古くから住む住民とは、明らかに寿命や健康状況の違いがあるということだった。汚染地域から移住してきた“新住民”の人びとに会った。

なお、この村とキエフを行き来するタチアナさんが、原発事故当時に胎児だった母親と子どもを探して、今回の取材に全面的に協力してくれることになった。

◎タチアナ・アンドロシェンコ



（1967年1月4日ノーブイミール村生まれ）事故当時は妊娠中。

長女：エカテリーナ（未婚）（1986年8月21日キエフ生まれ）事故当時は胎児。

次女：アレクサンドラ（1989年生まれ）3歳から胃炎が始まった。

三女：オリガ（1998年生まれ）乱視、脊椎に問題、片方の足が少し短い。



長女エカテリーナさん

◎タチアナ・デミジェンコ

長男：エフゲーニー（1984年プリピャチ生まれ）頭痛、歯が弱い、膀胱疾患。時々、血圧が



急激に変化する。次男は病気。

孫は1歳半と5歳。2人とも始終風邪をひく。

写真は、夫の墓の前のタチアナ・デミジェンコさん。汚染地域から移住してきた人は短命だという。

◎ワシリーナ・リトビネンコ

（1986年8月20日生まれ）事故当時、胎児。

娘：レーナ（2009年3月27日ペレヤスロフメリニツキー町生まれ）

「特に問題ない」と母のワシリーナは言うが、



タチアナさんによると「いろいろ問題がある」。

祖母：オリガ・セコレエスカ（1962年2月22日生まれ）風邪を引きやすく、血圧に問題。

ワシリーナさん（左）と娘のレーナ

◎エレーナ・ソコロヴァ

（1966年10月9日生まれ）事故当時はプリピャチ在住で妊娠中。

長女：ユーリヤ・テレーシェンコ（1986年7月12日キエフ生まれ）事故当時胎児。

特に問題はない。

長女の息子：デニス（2006年1月24日ペレヤスロフメリニツキー町生まれ）異常はない。

次女：アナスタシア 20歳は一緒に母親と住む。



エレーナさん。手に持っている写真は、出産後に原発関連施設で働いていたときのもの。

◎ドミートリー・コフクラク

（1986年10月26日生まれ）事故当時胎児。

13歳までは健康だったが、この年齢で甲状腺ガンにかかり手術した。

その娘アナスタシア（2006年7月26日生まれ）は健康に問題はない。

母：オリガ（1964年6月19日生まれ）事故当時グレーズリ村（原発から45km）在住。甲状腺に異常があり手術。血圧の変動が激しい。歯も弱く、39歳くらいから粉のようにボロボロになりはじめ、現在は上の歯がほとんど入れ歯になってしまった。



ドミートリー・コフラクさん。母親のオリガさんと。

◎ガリーナ・コワルチュク（1951年8月27日生まれ）1986年12月に甲状腺の手術。2005年線維筋腫の手術。孫：イワン・コプチーロ（1992年2月ノーブイミール生まれ）甲状腺に問題あり。



先祖が嫁入り道具として持ってきた伝統の刺繍を見せてくれたガリーナさん。

◎ヴァレンチーナ・ペトケーヴィッチ（1957年8月16日生まれ）事故当時プリピャチ在住。30歳までは健康だった。事故後に喉が痛くなった。背中や足が痛む。



娘：マリーヤ（1989年5月19日キエフ生まれ）腎臓が悪い。息子：オレグ（1994年コバリン村生まれ）風邪をひきやすい。

◎ソフィア・キリレンコ（1980年8月8日ノーブイミール生まれ）歯が少ない、入れ歯。



夫：ニコライ（1976年12月10日生まれ）甲状腺腫れ、椎間板ヘルニア。

娘：アナスタシア（1999年6月29日コバリン生まれ）生まれつき左肺が肺胚葉。嚢胞性発育不全。



体育の授業は常に見学、「夢は医者になること」と語る娘のアナスタシアさん（12歳）

<3月5日>

■小児神経外科病院を再訪問。

事故後の90年8月に生まれたアンナ・ペンジुकさんのパスポート等の書類確認。息子スタス君の治療記録、診断書などを確認の上、撮影。その後、下記の母子を取材した。

◎カテリーナ・シャフレービッチ



（1985年8月3日生まれ）ロブノ原発に近いフメリニツキー州在住。8歳で関節炎、11歳で軟骨腫瘍、13歳で卵巣の嚢腫（胞腫）、多発性硬化症。

娘：ソフィア（2007年12月20日生まれ）現在4歳だが、生後3週間から原因不明の病気。

◎ヴァレンチーナ・テルナプスカ

（1971年11月26日生まれ）ロブノ原発に近いロブノ州ブロニキ村在住。

長男：ヴィターリー（17歳）腎臓病、扁桃腺。

次男：アンドレイ（8歳）

甲状腺腫、心臓弱い。

三男：ボグスラフ（1歳

2ヵ月2010年12月

28日生まれ）手術2

回、脳水腫。



ヴァレンチーナ・テルナプスカさんと入院中のボグスラフ君

■ユーリー・アンドレーエフ(事故処理作業者)
再訪

我々の取材目的(原発事故当時に胎児だった母親とその子を取材する)を伝え、対象となる人物を探してくれることになった。



<3月6日>

正午過ぎ、キエフのボリスピリ国際空港へ到着。
帰国の途へ。

<3月7日>

成田空港着

(林 克明)

■次回(支援と取材)への準備状況

帰国後、コバリン村のタチアナ・アンドロシェンコさんよりメールが届いた。それによると、調査取材の対象となる母子が複数見つかり、当事者たちも取材への協力を表明している。

現在タチアナさんは、さらに取材対象者を探している。

5月下旬に第2回取材を企画中。

アーを企画中。小若代表が全日程同行します。チェルノブイリ原発の視察、事故の緊急対応と復旧に現場で関わった人の講演、地元支援団体会長の講演を聞き、病気治療を頑張っている「家族の家」に行き、お母さんと子どもたちと交流も行います。

真実は現場にあるのですから、このツアーにぜひご参加ください。

講演は通訳付き 定員 15 人 詳しい日程はお問い合わせください。

■チェルノブイリ・ツアー(9/24 成田空港・発～10/1 成田空港・解散)

参加費：32万8000円

チェルノブイリの子どもと孫の実情を知るツ

◇問い合わせ先

食品と暮らしの安全基金 担当：林 克明

TEL：048-851-1212

旅行代理店：ジェーアイシー旅行センター

チェルノブイリの子どもと 福島の未来の子どもを救う カンパのお願い

日本政府は、ウクライナ政府から放射能による被害情報などを提供してもらい、今後、福島対策に役立てていくことを決めました。

しかし、ウクライナでも、孫の被害調査は行われていません。

私たちは、ウクライナの子どもが適切な医療を受けられるように支援しながら、日本で子どもや孫に被害が出ない対策を立てる情報を得るため、現地調査を続けます。

これからの活動を継続するため、カンパをお願い申し上げます。

カンパは、子どもの医療支援と取材に、半額ずつ使わせていただきます。

「放射能から孫を救う基金」
郵便振替口座：00160-3-512738
加入者名：食品と暮らしの安全基金

食品と暮らしの安全基金代表 小若 順一

2012年4月13日